

人間労働力と人間的労働

——資本主義的生産様式のもとでの在り方——

山 本 二 三 丸

まえがき

- 1 資本主義的私的所有の意味
- 2 資本の生産物——社会的富
- 3 資本の存在様式としての人間労働力と生産手段
- 4 労働の二面性の展開
- 5 「労働の疎外」
- 6 人間労働力の排除と不具化・破壊
- 7 労働の生産力の増大
- 8 資本主義的取得法則
- 9 「金の卵」を生む貨幣の専制支配
発展法則
- 10 結びに代えて

まえがき

人間的労働の意義とその在り方こそが科学的経済学の解明すべき基本課題の一つにほかならないという考え方は、かなり以前から私の頭の中で温められてきました。それが論稿の形で発表されたのは、一九六一年三月刊行の本誌『立教経済学研究』第十四巻四号に掲載されました拙論『人間的労働の経済学的考察（一）』においてであります。この論稿は一九六二年十一月刊行の本誌第十六巻三号掲載の（六）までつづけられました。しかし、その後当面のさしせまった論究を要請する多くの問題がつきからつきへと生まれ、それらにかんする論文の作成・発表に逐われ、右の論稿に再びもどってその（七）を発表することができたのは、実に一九七五年五月刊行の本誌第二十九巻一号においてのことです。

右のようにしてその論稿は、一九七六年二月刊行の本誌第二十九巻四号掲載の（十）までつづけられたものですが、ここでまた社会主義社会の経済法則の究明という当面の課題についての論文作成の必要が起り、以後その課題についてさまざまな側面からの究明に時間をとられることになり、ついに今日まで、その続稿を書きあげることができないという、まことに申訳ない仕儀にたちいたってしまいました。最後の（十）を発表してから実に十一年の歳月が経過しています。

右のように、中断したままの形でおかれたことについては、私自身の精進不足に加えて、それ以外のつぎつぎに生じた緊切な諸問題の論究に逐われていたためもありますが、いまひとつは、この論稿の内容があまりにも広く多岐にわたっており、しかも二十数年前説明したことの連続・発展というものがはたして現在の読者の皆さんに誤りなくと

らえていただくことができてなにはどうかのプラスになることができるであろうかという危惧がきわめて大きく感じられたためでもあったということを申しあげておきたいと思ひます。

この論稿の(一)から(六)にいたるまでの叙述内容も、誤った諸「理論」——とりわけ「宇野理論」——の誤謬と迷蒙をただすことにそのかなりの部分が占められていたために、この論稿の積極的な論旨を読者が一貫してとらえることをむずかしくしたという難点もあります。

しかし、私としては、この論稿をそのまま中断した形で放置しておくことは、甚だ非良心的なことであると考えますし、また、かねてから私の提唱していますいわゆる「人間経済学」なるものの構想について読者諸君の理解を得られるための予備的説明もつくりあげておきたいとねがっていますので、一応完結するまで簡単な論究をつづけることにいたしましたわけです。

以前の論稿を継続するとはいっても、そのままの形をとってではなく、新しいテーマのもとに、できるだけ要点をまとめて簡潔な形で、と心がけたものです。ただし、従前の論究との関連をあらかじめ明らかにしておくことは必要と考えますので、その点をつぎに簡単に述べさせていただきますと思ひます。

この論稿の組み立ては、およそつぎの五つの章から成り立っています。(旧稿では、「三 人間的労働力の商品化」という章が入っていますが、これはその前と後の章を結びつけるためにいわば便宜的に挿入されたもので、主題にあって決定的な意味をもつものではありませんので、ここでは省くことにしました。)

一 人間的労働の基本的意味

二 本来的私的所有のもとでの人間的労働

人間労働力と人間的労働

三 資本制的私的所有のもとでの人間的労働

四 社会的所有のもとでの人間的労働

五 総括

つぎに、これまで発表された右の一および二の内容がどういう順序で説明されているかを示すために、その各節の見出しを並記してごらんにいれたいと思います。

一、人間的労働の基本的意味

(1) 富の源泉としての人間的労働

(2) 人間労働力の内容

(3) 合目的支出

(4) 労働手段

(5) 労働の二面性

(6) 労働の社会的性格

(7) 人間的労働の質的規定

(8) 労働の生産力

(9) 生産物の取得

(10) 人間の存在様式としての労働

二、本来的私的所有のもとでの人間的労働

- (1) 本来的私的所有の意味
- (2) 社会的富の規定
- (3) 商品生産における労働の二面性
- (4) 私的労働の社会的性格
- (5) 労働の対象化
- (6) 価値法則
- (7) 所有法則（交換の法則）
- (8) 価値の自立化
- (9) 發展法則
- (10) 商品生産のもとでの人間的労働のあり方

ここにかかげました一と二の各節の表題とその排列の順序をお読みただけならば、これら二つの排列がその意味内容において——大体において——相對應しているものだということがおわかりかと思ひます。いや、対応しているというのは正確ではありません。むしろ、一の各節のそれぞれについて、そこに「本来的私的所有」という生産関係を規定的要因としてあてはめてみるならば、そのそれぞれに対応して二の各節が導き出されてくるはず、と言つたほうがより適當と思われれます。

右のような各節のいわば対応關係、もしくは發展關係の解明というものが、実は、この拙い論稿の主要な狙いの一つであつたということを、私は、ここで改めて申しあげておきたいと思ひます。科学的な經濟學が眞に科學であるこ

とを主張することができるのは、実に、客観的な経済的發展法則を解明しうるものだという点に在ると、私はつねづね考えているものです。その経済的發展法則の貫徹のあり方を人間的労働について論究してゆこうというのが、私の論稿のひそかな目標のひとつであつたわけです。このような、各小節の組み立ての対応関係もしくは發展関係というのは、右の二の内容とここでこの小論のはじめにかかげられた目次の内容とを読みくらべていただければ、なおよりいっそう明らかにされるのではないかと考えます。そしてまた、この小論では、右のような対応関係もしくは發展関係を念頭において、それらの関係を明確にすることを主眼において、拙い説明をしてゆきたいとねがっているものです。最後の四の「社会的所有」のもとでは、それを構成する各節は、三にたいしてみたとき、二と三との間の対応「發展関係とはまったくちがった性質の対応」変化をあらわすものとなり、むしろ、一の各節の内容の發展したものともしうべきものにならないのですが、この点はまたこの小論につづく論稿において説明したいと考えています。

いづれにしましても、この小論は、これまで拙論『人間的労働の経済学的考察』を未完のままにしておいたという永年の私の学問的負債をなんとか償うことができばとの願いをもつて、いまひとつ、「人間経済学」構想の一環をここに呈示したいとの意図をもつて、発表させていただくことにしたものです。その表題を、『人間的労働の経済学的考察』のつづきとしないで、はじめにかかげたようにしましたのも、右のような諸事情を考慮したためのものであることを、ここに申しそえておきたいと思ひます。

1 資本主義的私的所有の意味

(一)

資本主義社会を組み立てている基本的な生産関係が資本主義的私的所有であるということは、いまさら言うまでもないところです。資本主義的私的所有とはどういうことかといえ、それは、資本家が生産手段を私的に所有しているのたいして、労働力の担い手である労働者は必要な生産手段をもたない無所有でその労働力を資本家に商品として売らなければならないという関係、簡単にいえば、所有者「資本家・対・無所有者」「賃銀労働者の関係を指して言ったものです。こうしたことは、いわば常識の範囲内にあることだといえますが、しかし、私たちは、資本主義社会の経済法則、とくにその経済的運動法則というものをただしく理解することができるとは、この資本主義的私的所有という概念について、その豊富な内容を、十分な広がりと深さにおいて、とらえていることが絶対に必要だということをよく理解していることが肝要です。そこで、つぎに、その内容のあらましについて簡単に述べてゆくことにしたいと思います。

まず第一に注意しなければならないのは、この言葉そのものが、「資本主義的」と「私的所有」という二つの文字を組み合わせたものだという点です。つまり、それは、「私的所有」というものについて、「資本主義的」という規定もしくは限定を加えたものだということ、このように、ある言葉の上に「〇〇的」という規定が加えられているのは、その言葉の意味が一つに限られておらず、いろいろの意味がそこに考えられる、もしくはふくまれているということ、したがって、ある特定の意味のものとして限定しなければならないということ、示しているものです。

つまり、その言葉には、「○○的」という規定のほかに、「△△的」もしくは「□□的」という規定が加えられること、いいかえれば、そこにはそれぞれ規定を異にしたものがあるということを示しています。そして、そのことは、私たちに、その言葉の意味内容を一面的に簡単に解釈することの誤りを教え、その豊富な内容をそれらの諸規定と結びつけてたたく把握することを要請しているものだ、といえます。

資本主義的私的所有という概念については、まさしく右のような、いわば弁証法的な考え方をもって対処することが絶対に必要です。まず、私的所有という基本的な言葉についていいますと、そこには「私的」という規定がつけられています。ですから、結局、右の言葉の核心は「所有」ということにあることがわかります。

まず所有とは、たんに持っているということの意味するものではけつしてなく、経済学においては、必ず生産手段の所有を意味するものです。人間社会が存続するためには、必要な物資、簡単にいえば物的富がなければなりません。これらの物は、天から降ってくるわけではなく、人間がさまざまな原材料や道具・機械などの生産手段をつかってつくりださなければならぬものです。これらの必要不可欠の生産手段なしには人間も人間社会も存続できませんが、これらの生産手段を所有してこれを自由に処分することができることを、経済学では、簡単に、所有（das Eigentum）というわけです。ところで、肝心なのは、この生産手段を所有してこれを自由に処分する者、つまり、所有する主体はだれか、ということなのです。この主体を明示しないでは、所有はおよそ宙ぶらりんで意味をなさなくなってしまう。その主体を示すものが、その上に加えられた規定にほかならないのです。

では、どういう規定をもった所有があるかといえば、そこには二つのものがあります。ひとつは、「社会的所有」であり、他のひとつは「私的所有」です。所有する主体は、もちろん、人間でなければなりません。しかし、その

社会を構成している人間全体が、いいかえれば社会そのものが、その社会にある必要な生産手段のすべてを所有し管理する場合が「社会的所有」であり、社会の各成員個人がひとりで自分勝手に一部の生産手段を所有してこれを自分ひとりで自由にしているのが「私的所有」であります。⁽¹⁾

(1) 「社会的所有」と「私的所有」とは、このように、所有する主体がまったくちがっていることは明白ですが、なお、これら両者の間では、所有される生産手段そのものに本質的な差違のあることによく注意することが肝要です。というのは、「社会的所有」の場合には、その社会にある必要な生産手段の全部が、ひとつ残らず、社会全体の所有するところとなっているのに反して、「私的所有」の場合には、その全体ではなく、その一部分を所有しているにすぎないからです。したがって、社会的所有と私的所有とが一つの社会の内部で並び存するということは絶対にありえないところですが、一部に私的所有が存在しているという事は、社会的必要が存立していないことを実証するものですし、社会的所有が現実には存在するところには、たとえばほんの一部分でも私的所有のひとつかけらも存在しえないのは、理の当然です。このことは、今日「社会主義国」と称される諸国の実態を究明するさいに、はつきりと念頭においておくことが大切です。「社会主義社会」にも、商品があり、価値や貨幣があるのは当然である」という、スターリンの発明した世紀的な反科学的タワゴトは、右の簡単な事実を正しく認識することのできないために必然的に生まれたものですが、これについては、また後段でふれることがあります。

(二)

つぎに問題となるのは、同じ「私的所有」という言葉について、そこに加えられている規定、つまり、「資本主義的」という規定です。これは、さきにも説明したように、「資本主義的」という規定のほかに、別の規定をもった「私的所有」が存在すること、それとのちがいと関係とを明示するために「資本主義的」という規定が加えられていることを示しているものです。そして、これによって、私たちは、「資本主義的」でない別の規定をもった「私的所有」を考え、これら二つの異なった「私的所有」の二形態について、それらの内容をただしく把握すると同時に、こ

れら二つの「私的所有」形態のちがいと関連とについての確な理解を得ることが絶対に必要であるということをお教えられるのです。

では、「資本主義的」でない、別の規定をもった「私的所有」とはなにか、といえば、それは、「本来的私的所有」にほかなりません。これら二つの「私的所有」形態のちがいは、まず生産手段を私的に所有する主体・人間がちがっているところにあります。「本来的」は、その主体が労働力の担い手であって、その労働力を支出して生産手段に働きかけてそこに必要生産物をつくりだす労働者そのひとであるものを指しますが、「資本主義的」は、その所有主体が労働しない資本家であって、貨幣を出して賃銀労働者を雇い、その所有する生産手段に結びつけて働かせる、というものです。

では、なぜ「本来的」という言葉をつかうかと言いますと、それには、二つの根拠があります。あるいは、この言葉は、二つの事柄を同時に明示しているものだ、と言ってもよいと思います。

そのひとつは、必要生産物をつくりだすには、人間労働力と必要な生産手段との二つだけがなくてはならず、そのほかのものはまったく不必要だということ、その労働力を支出して生産を行なう人間主体が、その働きかける生産手段を自分の思いどおりに所有し処分することができなければならないのは、当然すぎるくらい当然のことであって、このように労働する人間自身がその生産手段を私的に所有しているのは、私的所有としては当然に本来在るべき形態である、ということです。これにたいして、働かない人間が自分で充用することのない生産手段を私的に独占的に所有しているのは、生産の要因の在り方からみて、まことに不自然で、歪められた、したがってまた歴史的にみえられた短い一時期にのみ存在することを許された過渡的な私有形態でしかない、といわなくてはなりません。

いまひとつの根拠としては、労働力の担い手自身が生産手段の私的所有者であるという社会的な生産関係が歴史に先行していること、つまり、もともと本来的私的所有という生産関係を基盤として、その中から資本主義的私的所有という生産関係が生まれ、しかも、資本主義的私的所有は本来的私的所有という生産関係とその基盤として保持しているのだから片時も存続することはできず、本来的私的所有の基盤の上でのみはじめて存続・発展をとげることができるといふことである、ということだ。

(三)

右にみたように、私的所有には「本来的」と「資本主義的」との二つの異なった規定をもったものがあって、それらの間にどのようなちがいがいと関連があるかということのあらましがわかってきますと、私たちは、どうしても、つぎのような重大な問題にぶつからざるをえなくなりますし、そしてまた、それらの問題について正確な理解をえておくことが絶対に必要であるということを感じ知らされたいではありません。

その重大な問題というのは、なによりもまず、本来的私的所有という歴史的に先行していた、本来在るべき私的所有形態が、なぜ、必然的に崩れ、分解して、働かない者が生産手段を独占的に所有するという、不自然で歪められた私的所有形態に変化し発展したのであるか？ ということではないならなりませんし、いまひとつは、資本主義的私的所有と本来的私的所有という二つの私的所有形態を基盤とする資本主義社会において、これら二つのものがどのように関連し制約しあっているかということ、いささか先き走って申し上げますと、資本主義的私的所有が本来的私的所有をどのように支配し隷属させているか、資本主義的私的所有をつらぬく経済法則がいかにかこの資本主義社会全体の運動し変化を決定するものとなっているかという問題であります。

右の二つの問題のうち、あとの問題については、この小論のうちのこれから展開されるところをもって、曲りなりにもひとつの説明とすることができると考えますが、第一の問題については、行論ではふれえませんが、やはりここで簡単にその筋道を指摘しておく必要があると思います。この問題は、理論にかかわるものであるばかりでなく、またすぐれて歴史的事実にかかわるものであることをまず指摘しておきます。

まず理論的には、本来的私的所有という生産関係に規定されて、そのもとで貫徹せざるをえない経済法則、つまり商品生産の法則の作用があげられなければなりません。本来的私的所有のもとでは、労働生産物は自家需要充足のためのもではなく、他人のための使用価値をもつ商品として市場に出して自分の必要とする他人の生産物・商品と交換しなければなりません。その商品交換が生産物の直接的交換・物々交換からすすんで、その間に必然的に生まれた貨幣を媒介とするものとなると、商品生産者はいやおうなしに価値生産の激しい競争の中にひきこまれ、生産諸条件の比較的劣悪な生産者は、自分の生産物・商品の販売価格の低下、したがって必要生産物の入手・確保が困難となり、そのために、必要な貨幣量を得るために、生産手段（主として土地）や自身の労働力そのものを商品として他人に売り渡さざるをえなくなります。その反対に、生産諸条件の優良な生産者は、労働の生産力も大きく、必要以上の貨幣を獲得することができ、この貨幣をもって他人の生産手段を買い、また、労働力を買い入れて、これによって資本家としての生産を行なうことができるようになります。こうして、本来的私的所有の生産関係は崩れて、資本主義的私的所有の生産関係に変化・発展することになります。歴史的には、本来的私的所有者、いかえますと独立小生産者は、その圧倒的大部分が独立農民ですので、右のような資本主義的生産関係への移行は、ふつうには農民層の分解と言われ、これは、独立小生産者層の存在するとき、ところでは、つねに、現在にいたるまで、時々刻々に遂行されて

いる過程であります。

しかし、右のような、農民層の分解過程をもってしては、封建制社会の崩壊のあとに支配的役割をはたすべき資本主義的生産にとって、必要とする大量の賃銀労働者をつくりだすことはとうてい不可能です。搾取すべき無所有の、つまり労働力しかもたない賃銀労働者の調達が十分でなければ、資本主義的生産の成立・発展はおぼつかないことになりますので、ここに資本主義確立を支えるためのブルジョア的國家權力がその強力を余すところなく十二分に發動させるということになっていきます。大量の独立自営農民をその土地から追い立て（囲い込み運動）、都市に流れてきたよぎない浮浪民を残酷な法的処罰でむりやり低賃銀で長時間苦役しなければならぬ賃銀労働者に「鍛えあげ」たイギリスのめざましい「本源的蓄積」の過程は、あまりにも有名ですが、そのほかのどこの資本主義国でも、このような國家權力の強力による大量の賃銀労働者の「創出」がおしすすめられなければならぬことは、争う余地のない歴史的事実であります。

右のような二つの過程をまとめて、ひとこと言いあらわしますと、本来的私的所有のもとで必然的に貫徹する商品生産および貨幣流通の法則が自然発生的に資本關係を創り出すと同時に、資本自身が國家權力を操って資本關係の創出と拡大強化を強力的におしすすめることによって、資本主義的私的所有、つまり、資本主義そのものが生成・發展して支配的なものとなったのだ、ということになります。

以上いろいろの側面から資本主義的私的所有という言葉の意味する内容の広がりや深さというものを見てきましたが、これらはいずれも、資本主義的私的所有という言葉そのものと切っても切れないものであって、むしろ資本主義的私所有という経済学的概念の内容そのものを成しているということもできます。ですから、資本主義的私所有

または資本主義的生産様式という言葉については、そのままだちにそこにはすくなくとも以上述べてきたような内容がふくまれているものとして受けとめ、それらの内容のうちどの側面が当面問題となっているかということを考えてかかることも大切な思考様式であるといわなければなりません。

さて、以上資本主義的私的所有の意味についての説明がいささか広がりすぎた感がありますので、これをいわば予備的知識として、以下の各項目については、できるだけ簡潔に、要領をえた説明をしてゆきたいと思えます。

2 資本の生産物——社会的富

もともと社会の存続を支える必要生産物、つまり社会的富は、人間にとって使用価値をもつ労働生産物です。ところが、本来的私的所有の生産関係のもとでは、たんに使用価値をもつだけの労働生産物では、社会的富とはなりません。それは、生産者自身にとって使用価値をもつものではなく、生産者以外の他人にとって使用価値をもち、生産者自身にとっては交換価値をもつ物、つまりそれ自身価値をもつ商品でなければならない、ということになります。なぜならば、労働生産物が生産者自身から独立して価値をもつ商品となるのでなければ、私的生産者たちは一人残らず生存を保つことはできないからです。ここでは、商品としての労働生産物こそ、社会的富の唯一の存在形態なのです。

では、本来的私的所有を基盤としてそこに資本主義的私所有が生まれ、この資本主義的私所有という生産関係が支配するようになった資本主義社会においては、この社会を支える社会的富は、どんなものとなるでしょうか？ それは、もちろん、たんに人間にとって使用価値をもつだけの有用的労働生産物ではありません。では、本来的私的

所有のもとでの社会的富としての商品は、どうでしょうか？ 残念ながら、価値をもつ商品としての労働生産物をもつてしては、まだ資本主義社会を支える社会的富とはなりえないのです。それは、なぜでしょうか？

誰でもよく知っているように、資本家が、賃銀労働者を雇い入れて労働生産物を生産するのは、たんに価値をもつ商品を生産してそれを販売して投下した資本価値を回収するということを目的にしているものではありません。それでは、自分では労働しない資本家が自分の取り分として取得する価値はないことになってしまいました。資本家が生産を行なうのは、社会のために必要な生産物を、商品としてつくって提供するという殊勝な心かけにもとづくものなどではけつしてないことは、誰でもよく知っています。彼の唯一・主要な目的とするところは、その所有する貨幣を資本として投下し、これを生産手段と人間労働力に代え、これら二つの生産要因を結びつけて労働生産物を、しかも、投下した価値よりもずっと大きい価値をもつ労働生産物・商品を生産し、これを販売して投下資本価値を超える貨幣額を、つまり、元の価値とこれを超えるだけ大きな剰余価値とを首尾よくふところに入れる、ということなのです。つまり、剰余価値をふくむ労働生産物・商品の生産によって、はじめ、資本家は資本家としての生存を維持し、さらにその上にその資本をますます増大してゆくことができるのです。もし、労働生産物がただの商品であつて、剰余価値をふくむ資本の生産物としての商品でなかつたとすれば、資本も資本家も剰余価値をば実現することはできず、存立の基盤を失って崩壊することになります。つまり、資本主義的私的所有にもとづく資本主義社会そのものが存続しえないことになってしまふのです。

以上によつて、資本主義社会を支える現実的富、いいかえますと社会的富は、資本の生産物としての労働生産物、つまり剰余価値をふくむ商品でなければならないということが明らかであると思ひます。

ところで、このような資本の生産物としての労働生産物、つまり剰余価値をふくむ商品については、つぎの点をし
かと銘記しておくことが必要となります。と申しますのは、この資本の生産物としての商品においては、本来私的
所有のもとでのように、その商品のそなえている社会的使用価値が規定的・主導的地位を占め、その商品が社会にと
って現実に正常な需要充足に必要な使用価値をもっているかぎり、それにふくまれた価値の大きさに応じて交換さ
れ、それによって社会の正常な存続・再生産を支えるものとなることができるといふようなものでは、けっしてない
からです。資本主義社会では、その存続を支える必要生産物はその圧倒的大部分が資本によって生産されて、一方的
にその社会の成員に与えられるもので、そこに消費者にとっては選択の余地はほとんど残されていないのが実情で
す。消費者大衆は、たとえ人間生活にとって不適当な、ときとしては害毒をもたらすような自然的形態、つまり、反
社会的使用価値をもつ資本の生産物・商品をも購入せざるをえない立場にあります。資本としては、できるだけ大き
な剰余価値を実現して獲得することが唯一最大の目的ですから、その商品の社会的使用価値は当然二の次ぎの問題で
す。つまり、本来、社会の存続・発展を支えるに必要な使用価値をもつ労働生産物が社会的富であったのに、ここ資
本主義社会では、剰余価値が唯一の規定要因となつて、使用価値は決定的意味をもたず、むしろ反社会的な有害な自
然的形態をもつものであつても、剰余価値の実現・獲得を保証するものであれば、いくらでも「社会的富」として国
民に投げ与えられることになつていふのです。言つてみれば、本来、使用価値と価値が対等な二要因として商品の本
質的内容を成していたものが、ここでは、価値——厳密には剰余価値——が使用価値を従属させ、すすんではこれを
否定するものとさえなつていふ、という次第です。かつては、そして本来は、正常な使用価値をもつ生産物のみが社
会を支える社会的富であつたものが、ここ資本主義社会では、まさに転倒して、社会的使用価値をまったく有しない

生産物、社会の存続を危くする恐れのある生産物が、社会的富としてたえずつくりだされ、社会を埋めつくすということになっています。現実的富の否定としての社会的富——このきわだった特質こそ、資本主義的生産様式の歴史的過渡的性格を明示するものと言わなければなりません。⁽²⁾

(2) 正常な社会的使用価値をもたず、むしろ有害無用である商品でも、儲かるとなれば、いくらでも生産して消費者大衆におしつけないではいられない資本主義的企業のことです。当の生産物・商品の使用価値の問題にくらべればはるかに資本にとって重要性をもたない副産物——騒音、有毒ガス放散、ヘドロ山積、環境破壊、有毒物資たれ流し、等々——について、当然の関心を払うどころか、むしろ、最大限の剰余価値獲得のための当然の必要手段と心得ているのが、とくにこの国の利潤欲の奴隷たちのつねです。もっぱら資本の利益に奉仕する国家権力が掛け声だけの公害防止でお茶をにごし、おざなりの監督で前期的な労働災害・人災の頻発に寄与しているという実情も、また、この歴史的社会的性格を露呈しているものといえます。

3 資本の存在様式としての人間労働力と生産手段

人間社会は、その文字の示すとおり、本来人間が主人公であって、人間が支配する、人間のための社会であって、そこでは、人間は、その人間労働力を流動させて意識的・能動的に社会的必要労働の一環を担っているかぎりにおいて、社会的人間として生存していることを認められるものです。ですから、生産の主体はあくまでも人間労働力の担い手である労働者であって、生産手段は、死んだ生産要因として、労働力の担い手の人間的労働を媒介し、これに奉仕するかぎりでは生産手段として認められるものだということは、いうまでもないところです。

ところが、資本主義社会では、事態はまったく反対で、主人公として支配しているのは労働力の担い手である人間ではなくて、資本そのものとなっています。たえず剰余価値を生みだし、自己増殖をとげてゆく資本が、生産・分配

の面においてばかりでなく、社会生活のすべての分野において支配しています。労働力の担い手である人間は、すべて、その資本の価値増殖運動に奉仕するかぎりで、その生存を保証されなければならないことになっていると言っても、けっして過言ではありません。いや、それどころか、労働力の担い手である人間そのものが、見方によっては、資本そのもののひとつの存在形態にすぎないと言ふことができます。

資本は、まずはじめに、ある一定の価値額、たとえば五千万円の貨幣としてこの世界に登場してきます。しかし、そのままの形態では価値増殖することは絶対にできません。価値とは人間の抽象的人間の労働が生産物・商品に對象化することによってはじめて生み出されるものであるという科学的な価値概念に頼るまでもなく、価値増殖は、商品交換において生ずるものではなく、ただ、労働力の支出による商品の生産においてのみ行なわれるものであることは、自明のところudur。労働生産物・商品を生産するために必要不可欠な生産要因が人間労働力と生産手段とであることも論をまたないところです。資本は価値増殖をとげるために、その一半は人間労働力に、他の一半は生産手段に、その形態を変えなければなりません。言いかえますと、人間労働力も生産手段も、資本が価値増殖をとげるために一時的にそのような姿をとったもの、つまり資本そのものの過渡的存在様式にほかならないわけです。

一方は、人間労働力をその一身に担っている生きた人間主体であり、他方は死んだ物的生産手段ですが、どちらも資本が一時的にそのような姿をとっただけのものですから、資本の価値増殖運動の命ずるままにそれぞれの機能を果たさなければならないことになっています。そこには、それ以前にみられたような生産の二要因の在り方やそれら二要因の間の相互関係はまったく消え失せて、それらとはおよそかけはなれた、新しい、注目すべき特徴があらわれて支配するようになっていのです。

まず、生産の主体「主人公は価値増殖を唯一最大の目的とする資本そのものであって、人間労働力はただそのためにのみ存在し機能するものとなっているわけですから、その労働力の流動、つまり人間の労働は資本にとって満足のゆくまでの時間延長と密度強化が必然となります。その労働力の流動そのものも労働力の担い手自身とは無関係に、むしろ担い手自身の意に反したものとして担い手自身を抑圧してはいません。この点は、後段の「5」と「6」において改めてふれることにしましょう。

つぎに注目されなければならないのは、労働力の担い手である生きた人間と死んだ生産手段との相互関係の逆転ということです。かつては労働力の担い手が生産主体として意のままに生産手段をつかい、自分に役立たせていました。しかし、資本主義的生産様式の支配する資本主義社会では、生産手段はすべて機械化され、一個の自律的運動機構となっていて、労働力の担い手は、それぞれの部分機械に従属してその作用について補助的機能をはたすだけのいわば部分機械への付属物としてしか意味をもたないものとなっています。ここでは、明らかに、人間が機械を使って自分に役立たせるのではなく、人間が機械に奉仕する付属物になってしまっているのです。「機械は、人間の労働を軽減するためのものである」という、むかしから言いふるされた文句が、どんなに鉄面皮なおためごかし、的空文句でしかないかということ、私たちはよくよく認識していることが大切と思います。

およそ以上の説明によって、私がこの「3」の表題としてかかげました「資本の存在様式としての人間労働力と生産手段」という言葉がどんなに深刻な意味内容をもったものであるかということが、よくわかりただけかと思えます。それは、たんに、人間労働力と生産手段とは、資本が資本として存在し機能するために必然的に採らざるをえない存在形態をあらわしているものだ、ということの意味するだけのものではないのです。

それは、はるかにきびしい内容をもったものです。人間労働力と生産手段とが資本の存在様式にほかならないということは、この資本主義社会では、人間労働力も生産手段も、資本のひとつの過渡的存在形態としてしか存在することも機能することもできないということなのです。つまり、人間労働力は、商品として資本家を買われ、資本家の指揮のもとに流動させられて、できるだけ大きな剰余価値を生まなければならない生きた生産素材としてあるかぎりにおいて、人間労働力として認められるのであって、資本家のために剰余価値を生むために流動させられて文字どおり苦役に従事しない労働力は、人間労働力として存在することは許されないことになっていっています。生産手段についても、同じように、それが剰余労働を労働者から吸いとる死んだ主体として機能するかぎりにおいて、生産手段として存在することを許されているのです。労働者から最大限の剰余労働を搾りあげる死んだ主体として労働者を従属させているかぎりで、それは、生産手段として認められ、生産手段として機能しつづけることができる、ということになっていのです。本来私的所有のとも人間労働力と生産手段とが生産の二要因であることには変わりはないのですが、この二要因が、資本主義私的所有のもとでいやおうなしに与えられ規定されざるをえない実質的な社会的地位と意義は、なんと、驚くべき変化をとげたものとなっていることでしょう。⁽³⁾

(3) 私たちは、右のような、「資本の存在様式としての人間労働力と生産手段」という否定的・消極的側面のみ目を奪われてはならないと考えます。それは、「資本の存在様式としての人間労働力と生産手段」は、その反面、肯定的・積極的側面をそなえているものであるからです。ここでは、人間労働力は、本来私的所有のもとのように、個別的であって個別的作業しかできないような、発達程度の低いものであってはならず、必ず、多数の労働力が結びついた大規模な共同労働を遂行する発達した労働力であればなりませんし、生産手段も同様に、個別的作業しかできない小規模・幼稚なものであってはならず、必ず、多数の労働力の共同労働によってのみ機能しうる大規模な、機械化された生産手段でなければならないからです。

このような多数の発達した労働力の担い手の共同労働と機械化された大規模な生産手段とは、いかえれば、社会的労働力と社会的生産手段にほかならないのであって、もし、それらが資本の存在様式であることを完全に揚棄しつくして、社会的労働力の担い手たちが主人公として、主体的・積極的に社会的生産手段を支配し合理的に駆使するようになれば、そこには、文字どおりの社会主義的生産様式がつくりだされるといふことになるわけです。資本主義的生産様式が過渡的なものであるといふことの意味内容は、さわめて奥深いものですが、右のように否定的側面と肯定的側面とを合せもっている点にそれを読みとることが肝要と考えます。

4 労働の二面性の展開

人間労働力の支出が必ずある特定の具体的形態をとって行なわれなければならないこと、したがって、人間的労働とは、人間労働力の支出一般という内容とある特定の支出の形式との統一であり、また統一としての運動でなければならぬことは、すこしく正確に、論理的に思考するならば、明らかすぎるくらい明らかです。しかし、このような労働の二面性の把握にもとづいて商品生産の経済法則を科学的に説明することは、マルクスによってはじめたなしとげられたことで、このことは、マルクスの名著『資本論』第一巻第一章第二節の冒頭に明記されているところです。

ですから、人間は、およそ生活に必要な労働をするかぎり、つねにこの二面性を考慮して、それぞれ必要な有目的具体的労働としてそれぞれ必要な人間労働力の支出、つまり労働量を計算にいれておかなければなりません。ところが、本来的私的所有の生産関係のもとでは、私的生産者の労働は私的労働のままでは生存に必要な生産物を受けとることはできず、どうしても、その私的労働を労働生産物に対象化・物化させることによって、社会的総労働の一分子

であることを実証しなければならず、ここに彼の労働の二面性を労働生産物の物的形態に転化させることが必要となります。つまり、彼は、その有用な具体的労働という一面を労働生産物の有用な自然的形態に対象化させると同時に、他の一面である抽象的人間的労働を労働生産物のうちに対象化させてその商品そのものの価値とし、こうして、他人・社会にとって有用な自然的形態、つまり社会的使用価値と、社会的な価値とをもつ商品を提供しなければならず、市場においてそれが社会的使用価値をもつことが実証されたときにはじめてその私的生産者の私的労働は社会を支える社会的総労働の一分子をなすものであることが実証され、それによってそこにふくまれた価値の大きさ、つまり彼が支出した社会的平均的労働の量に応じて、社会・他人から自分の必要とする労働生産物を——自分の労働生産物・商品とひきかえに——受け取ることができる、ということになっていのです。

私的所有以前の労働力の担い手自身が必要な生産手段を所有している場合と本来的私的所有に移った場合とを比べてみますと、さきには、人間は、労働の具体的形態をもって直接に自分に必要とする自然的形態の生産物を、ある一定分量の抽象的労働をもってつくりだしていたのたいして、あとでは、具体的労働を労働生産物そのものの使用価値にし、抽象的労働を労働生産物そのものの価値にし、この使用価値と価値とをもつ労働生産物・商品を出して、それとひきかえに、はじめて自分の必要とする具体的形態の労働生産物を——その価値、つまり労働量に応じた分量だけ——手に入れることになるという次第です。

しかし、右に述べたのは、いずれも、労働力の担い手である人間が主体であって、人間が主人公としてその存続に必要な生産物を生産している場合です。資本主義的私的所有のもとでは、事態はまさにあべこべになり、主体は資本であり、人間は資本の価値増殖の一つの生きた材料にすぎないものになっています。ですから、ここでは労働の二面

性の意義はさらに一段と発展したものとなっています。というのは、労働力の担い手、つまり賃銀労働者の労働は、たんに、使用価値をつくりだす具体的労働と価値をつくりだす抽象的労働との二面をもつものだけであってはならなくなるからです。

資本家による商品生産に必要な素材として購入された人間労働力は、一個の商品であって、それは、他の物的商品と同様に、当然、使用価値と価値とをもっています。このどちらも、ふつうの物的商品とちがって、特別の、独特のものであるところが重要なのです。まず、その使用価値とは、この商品に労働力を適当に働かせれば、それ自身もっている価値に再生産費よりはるかに大きい価値をつくりだすことができますというものです。では、労働力に商品の価値は、といえば、それは、結局、労働力の担い手である人間を健全な、労働しうる状態に維持し再生産するための必要生活手段の価値総計をば、この商品の販売期間で除すことによって得る価値額であって、たとえば、年価値、週価値、日価値というように、必ず一定の期間について算定されなければならないことになっています。しかし、必要生活手段の範囲、種類、量の確定がむずかしいうえに、文化的要素のほかに歴史的諸事情による制約ということも加わるので、たいていは、実際の再生産費を下回ったものが価値とみなされがちなのです。

資本家は、まず、労働力に商品とその価値とおりの賃銀で買入れるとして、これを生産手段に結びつけて流動させ、その労働の二面性をつぎのようにたくみに利用することになっています。

まず、その流動の具体的有用的形態、つまり具体的労働によって、労働生産物に商品の使用価値をつくりださせると同時に、その抽象的人間の労働によって、労働生産物に商品のうちにあらたに価値を生みださせます。このさい、その具体的労働は、たんに生産物に商品の使用価値をつくりだすというだけではなく、生産手段——機械、道具や原

材料、等々——を生かしてやり、その価値をば生産物に移転してやることによってそれを保存してやります。もし、具体的労働が加わらないとすれば、それらはたちまち錆びたり変質したりして、オシヤカになり、価値は必ず失われしてしまうことになります。しかし、このような、生産手段の価値の移転・保存という労働者の具体的労働の有難い役立ちにたいしては、資本家は鏝一文払おうとはしないものです。もう一方の抽象的労働の役立ちにおいては、資本家にとつて、なおいつそう、こたえられないものがあります。それは、労働力の流動が長時間になればなるほど、生産物・商品に対象化する価値はますます大きくなるわけで、しかも、その労働時間の長さについては、明確な限界も規定もなく、可能なかぎりいくらでも延長できるという事情があるからです。たとえば、労働力・商品の再生産に必要な日価値をつくりだすために通常の5労働時間が必要としますと、人間労働力はなおそれ以上に、たとえば3労働時間支出することができ、しかも、それによってその人間労働力は健全な独態に維持・再生産されることができるといふ、まことにすばらしい天賦の才能もっています。正常な人間は、5労働時間分の生産物を食べて8労働時間働いて生産物をつくりだすことができるからこそ、この3労働時間のつくりだすいわゆる剰余生産物が、社会の発展を支え、しかもあらゆる文化的資産から不労階級まで生みだし支えることができるのです。

資本家は、人間労働力に固有の、右の天賦の才能を十二分に心得ていて、これを最大限に利用することによって、つまり、右の例について言いますと、人間労働力を——その価値通りに5時間分を支払って——8時間、いや、9時間、10時間と働かせることによって、3時間どころか、4時間、5時間分の価値を剰余価値として、まふまふそのふところにいれることができるわけです。

以上によって、労働の二面性というものが、本来的私的所有のもとでの商品生産の場合とちがって、資本主義的私

的所有のもとでの資本主義的商品生産においては、その内容が拡大されて、はるかに重要で決定的な意味をもつものとなつてゐることがよくわかりと思います。その新しく加つた、重大な意義をまとめて申しますと、具体的労働については、それによつてはじめて生産手段の価値が損耗することなく生産物・商品のうちに移転し保存されることが可能になつてゐるのだということ、そして、抽象的労働については、それによつてはじめて、労働力の再生産に必要な労働時間を超えて労働時間を可能なかぎり延長することによつてできるだけ大きな剰余価値の生産・搾取が可能かつ必然となつてゐるのだということ——これがその要点といえます。

5 「労働の疎外」

この節の表題に括弧をつけたのは、それがふつうには使われない、したがつて常識をもつては理解することがむずかしい、特殊な用語であるからです。もともと「疎外」というのはドイツ語の *die Entfremdung* の訳語で、これは *friend* にするといふ意味の言葉です。 *friend* とは、英語の *strange* に当る形容詞で、「よそよそしい、縁遠い、関係のない」ということをあらわしています。しかし、この *die Entfremdung* を「疎外」と訳したときには、それは、たんにあるものを遠ざけること、またはそれになりたいしてよそよそしくするといった、私たちの日常使ひなれてゐるものとはまったくちがった特殊な意味をもつものとされています。つまりそれは、あるものが本来それ自身のうちにそなえてゐるもの、またそれ自身のうちから生まれてそれに属してゐるものが、そのもの自身から離れて自立化し、そのものとは関係のないもの、無線のものとなり、そのものにたいしてまさに対立したことになる、ということを指していったものなのです。

では、右のような意味をもつ「疎外」を労働に結びつけてできた「労働の疎外」という言葉は、どういう意味をもつかといえば、それは、要するに、人間労働力の流動としての労働そのものが、その労働力の担い手である労働者その人自身にたいして、無縁のものとなる、無関係のものとして対立する、ということを指しているものなのです。

本来、労働とは、労働力の担い手自身が彼自身の身体のうちにある労働力を主体的に意識して合目的に流動させることであって、終始彼自身のための彼自身による活動であることは、いまさら言うまでもないところです。資本主義社会以前の歴史的諸社会においては、本来的私的所有のもとにおいてさえ、労働は、労働力の担い手である労働者自身のものとして、その意志にしたがってその意図どおりに行なわれてきたものです。しかし、資本主義的生産様式の支配する資本主義社会では、まさに本論稿の「3」でよく見てきたように、人間労働力は、資本そのもののひとつの存在様式にすぎないものとなっています。つまり、それは、労働力の担い手である賃銀労働者自身のものではなくして、まさに資本によってのみ動かされなければならないものなのです。したがって、その人間労働力の流動である労働そのものは、当然に資本の指図のままに、その命ずるとおりに、労働者自身の意図とは無関係に遂行されるものとなり、労働者自身は、その無縁となった労働そのものによって引き回され支配されるものとならざるをえないのです。労働者自身の活動である労働が、労働者自身の意志を抑えつけ、彼を束縛するもの、強制するものとして、彼自身に対立するものとなっているのです。これが、文字どおり「労働の疎外」です。

本来、労働力の流動としての労働そのものが労働力の担い手である労働者自身の意識的主体的活動として彼自身に従属することは、当然すぎるぐらい当然のことです。ところが、資本の支配する資本主義的生産様式のもとでは、この当然のことが行なわれるどころか、まさにその正反対のことが、つまり、労働そのものが労働者自身から無縁のも

のとして自立化し、労働者自身を支配するという、驚くべき事態が、一般的に行なわれているのです。私たちは、資本主義的生産様式のもとでのこうした「労働の疎外」の不合理、反人間性を糾弾するまえに、なぜそれが必然的に生まれ支配的になっているのかという、その客観的な根拠、いわゆる必然性というものをはっきりと認識することが肝要です。「労働の疎外」がなければ、資本主義的生産様式は、発展することはおろか、一日たりとも存続することはできないものなのです。

右のような「労働の疎外」は、人間労働力と生産手段とがたんに資本の存在様式であるにすぎないことから必然的に生まれたものですし、また、そのことのひとつのきわだった現われ方にほかならないものなのです。つぎにとりあげられる「人間労働力の排除と不具化・破壊」も、同じく、右の資本の存在様式としての人間労働力という特徴から必然的に生まれる法則的現象であるということができます。

6 人間労働力の排除と不具化・破壊

およそ人間社会が生まれてからこのかた、人間労働力は、社会の存続・発展を支える必要生産物の生産のための唯一の主体的要因として動かすことのできない決定的・主導的地位を占めてきました。ところが、どうでしょう、資本主義的生産様式のもとでは、人間労働力は、たんに資本の一つの存在様式にすぎないものとなり、資本に奉仕するかぎりにおいて、つまり、資本にとって満足すべき剰余価値を生産するかぎりにおいて、労働力として機能することを許されるものに成り下がってしまいました。ですから、資本にとって満足すべき剰余価値を生産し提供することが不可能となった人間労働力は、無用のものとして放り出されたままにされてしまいます。資本主義的生産が高度の発展

をとげ、機械化された大規模生産組織が支配的になってきますと、生産手段の増大に比べて、労働力の占める割合は、ますます相対的に——ときとしては絶対的にも——減少してゆきます。たえず新しい、進んだ大規模な機械体系が採用されてゆくにたがって、これに従事する労働者数が減ってゆくことは、とりわけ、製鉄、機械製作等の大工業部門において著しいものとなっています。つまり、資本として機能すべき必要労働力、したがって必要労働者数は、たえず相対的に減少してゆくわけですから、この社会の発展を支えるものとして当然に増大しなければならぬ労働者人口のうちのみならず増加する部分は、社会を支える労働力として機能することを拒否されてしまい、こうして失業労働者の比率は相対的にますます増大してゆくこととなります。人間労働力の担い手のますます多くの者が、資本にとって不用のものとされ、そのために人間として生存することすら拒否されるといふ、この驚くべき非人間的事態がどのようにして必然的に生まれてきたかということに思いをいたすならば、この資本主義社会が、人間のための社会ではまったくなく、資本のための、資本の支配する社会でしかなく、したがって本来の、人間のたの、労働力の担い手である真の人間のたの社会にとって代わられなければならないものだということが、つまり、この資本主義社会は、たんにひとつの過渡的な社会にすぎないものであって、おそかれ早やかれ、真にその名に値する人間社会を労働力の担い手たち自身が築きあげるために、根本的に変革されてしまわなければならないものだということが、はっきりと認識されてくるはずでず。

資本主義的生産が発展すればするほど人間労働力はますます「過剰」になり、不用のものとして排除されてゆくという法則は、つとにマルクスによって資本主義的蓄積の一般的法則として主著『資本論』のなかでつぶさに解明されているところではず。

では、幸いにして「排除」を免れて僅かな賃銀とひきかえにその人間労働力を資本の命ずるままに流動させることができる労働者については、事態は望ましいものとなっているかといえ、それは、けつしてそうではありません。資本家が労働力を買うのは、その労働力を健全に維持し発達させるに必要とされる適当な流動を行なわせるなどという、殊勝な心がけによるものではさらさらないということは、誰でもよく知っています。資本家にとっては、人間労働力は、そこからできるだけ大きな剰余価値を搾り出すための生きた生産素材のひとつでしかないのです。ですから、最大限の剰余価値の搾取・実現のために、とことん労働時間の延長と労働の強化をおしすすめないではいられないのです。大規模な機械化が広範におし進められて、労働者は部分機械に仕える生きた付属物として簡単・無内容的な補助作業ばかりにしばりつけられることになり、したがって、彼の労働力は、部分作業しかできない一面的な、不具化されたものとなってしまいますし、また極度に意志力の継続した緊張を要求する簡単・無内容的な労働へのしばりつけは、労働力の均衡のとれた流動を妨げて、必然的に労働力そのものの破壊までもひきおこします。オートメ化された多くの生産的企業においてはますます増加する精神障害による労働力の破壊の進行という恐るべき事実は、このことを如実に示しているものです。

右のような、資本主義的生産の発展に伴って人間労働力の不具化・破壊が必然的に増進するという法則もまた、いまから一二〇年も前にマルクスによってつとに説明されているところですが、しかし、資本主義社会の表面に出てくる経済現象についてあれこれ「理論的」文章をものされる方がたはあまたおいですが、右の法則の貫徹の実態について論究される方がたえて少ないということは、浅学の私などにとっては、とうてい解しえられないところです。こうしたことについて改めて読者諸君に留意していただく意味もかねて、右の法則を明確に定式化して打ちだしているマ

ルクスの叙述をつぎに引用してかかげておきたいと思ひます。なお、ここには、「労働の社会的生産力を高くするための方法」という点が強調されていますが、これは、いうまでもなく資本が最大限の剰余価値を搾取し実現するために不可避的に労働の生産力を高めざるをえないことを示しているものにほかならないのです。こうした労働の生産力の増進の意味については、つぎの「7」でふれたいと思ひます。

「われわれは第四篇で相対的剰余価値の生産を分析したときに次のようなことを知った。すなわち資本主義的体制のもとでは、労働の社会的生産力を高くするための方法はすべて個々の労働者の犠牲において行なわれるということ、生産の発展のための手段はすべて、生産者を支配し搾取するための手段に一変し、労働者を不具にして部分人間となし、彼を機械の付属物に引き下げ、彼の労働の苦痛で労働の内容を破壊し、独立の力として科学が労働過程に合体されるにつれて労働過程の精神的な諸力を彼から疎外するということ、これらの手段は彼が労働するための諸条件をゆがめ、労働過程では彼を狭量陰險さわるる専制に服従させ、彼の生活時間を労働時間にしてしまい、彼の妻子を資本のジャガノート車の下に投げこむということ、これらのことをわれわれは知ったのである。しかし、剰余価値を生産するための方法はすべて同時に蓄積の方法なのであって、蓄積の拡大はすべてまた逆にかの諸方法の発展のための手段となるのである。だから、資本が蓄積されるにつれて、労働者の状態は、彼の受ける支払がどうであろうと、高からうと安からうと、悪化せざるをえないということになるのである。最後に相対的過剰人口または産業予備軍をいつまでも蓄積の規模およびエネルギーと均衡を保たせておくという法則は、ヘファイストスの楔がプロメテウスを岩に釘づけにしたよりもっと固く労働者を資本に釘づけにする。それは資本の蓄積に対応する貧困の蓄積を必然的にする。だから、一方の極での富の蓄積は、同時に反対の極での、すなわち自分の生産物を資本として生産する

階級の側での、貧困、労働苦、奴隸状態、無知、粗暴、道徳的墮落の蓄積なのである」(マルクス・エンゲルス全集、第三卷、邦訳大月版、八四〇ページ)。

なお、右の文中の「労働者の状態の悪化」ということは、「餌」の多寡だけにしか関心をもたない動物的思考癖の俗物どもがえてして推測するように、生活が苦しくなるとか「貧困化」するとかいうことではさらさらなく、労働力の担い手としての状態の悪化、つまり労働者の担っている貴重な労働力そのものの一面化・不具化・破壊をこそ指しているのです。動物的思考癖の持主たちにとっては、マルクスがことさら明記していてくれる「彼の受ける支払がどうであろうと、高かろうと安かろうと」という文字がどうしてもその眼に映らないことになっているのも、まことにもつともなことといわなくてはならないのです。

7 労働の生産力の増大

本来的私的所有のもとでは、労働の生産力はまだきわめて低く、しかもその発展は狭い限界内にとめおかれていた。それは、生産の性格が自家需要充足のためというように規定されていたので、必要量以上に生産する必要も動機ももたず、また、生産を必要量以上に増加しようとしても、労働力は労働者個人に頼るほかになく、さらに生産手段も労働者個人の充用にのみ適当した小規模・零細なものであったため、それはとうてい不可能であったのです。これにひきかえ、資本主義的私的所有のもとでは、生産の性格は、自家需要充足どころではなく、できるだけ大量の剰余価値獲得を唯一最大の目的とするものであり、そのためにできるだけ多量の商品を、できるだけコストを低くして生産する必要があり、また、そのために必要な生産条件、つまり、多数の社会的労働力も大規模な社会的生産手段も

ととのつていて自由にすることができるとは、その労働の生産力は、限度なしに——資本の大きさに比例して——増大することができずし、またそのように労働の生産力をますます増大させないでは、資本は、競争に打ち勝って資本として存立し発展をとげることはできないようになっていきます。このことは、すでに周知のところ、改めて説くまでもないところです。ですから、ここでは、資本主義的私的所有のもとでの資本による労働の生産力の限度知らずの増進というものがもっている重要な特徴とその社会的意義について、簡単にその要点を指摘しておくことにしたいと思います。

まず第一にあげられるのは、資本による労働の生産力の増進は、労働力の担い手である真実の人間全体の生活を豊かにし、その貴重な労働力の全面的発展をもれなく確実に推しすすめるためのものなどではまったくなく、ただただ資本ができるだけ大量の剰余価値を労働力の担い手から搾取し実現するために、資本によっていやおうなしに強制されて推進されているものだ、ということ。労働の生産力がいつそう高まって同じ生産物・商品が——あるいはよりすぐれた同種の生産物・商品が——より安く生産されるという技術の進歩をとらえて、それは「社会のため、全人民のために喜ぶべきことだ」と手放しで賞めたたえる者があるとすれば、それはまことに「おめでたい」人間の早や合点といわなければなりません。それは、なぜでしょうか？ 私たちは、さきに本論稿の「6」で明らかにされたこと、そしてとくにその結びにかげられたマルクスの金文字をここで考え合わせてみなければなりません。これからあと、第二、第三というように挙げられているのは、すべて、右の問いにたいする答えとなるものです。また、資本のもとでの労働の生産力の増大というものの特徴と社会的意義の説明のつづきでもあるわけです。（そのことを示すために、第二、第三、というように簡単に頭書をつけてあります）。

第二。さきの「6」で明らかにされているように、労働の生産力の増大は、必ず、労働者の担っている人間労働力の一面化・不具化および精神的能力の減退または萎縮を惹き起すばかりでなく、他方において必ず、労働の強化を伴い、さらにますます多くの人間労働力を資本にとって不要なものに、つまり相対的過剰人口の中に引ききれないではいけません。資本による労働の生産力の増大は、資本蓄積をおしすすめ、労働者の状態をいつそう悪化させ、貴重な人間労働力そのものの健全な再生産を阻害し危機におとし入れるものとならずにはいけないのです。

第三。労働の生産力の増大によって、生産される労働生産物はますます大量になりますが、それは市場で販売され購買者の手に、その貨幣とひきかえに引き渡されて、はじめて資本家のために剰余価値を実現してやるものになります。しかし、労働の生産力の増大はとどまることなく、したがって市場に出される労働生産物「商品」はますます大量になってゆきますが、購買者の方はおいそれとは増加してゆきません。それは、資本主義的生産様式が支配しているところでは、きわめて広範な人民大衆は賃銀労働者「賃銀奴隷」としてその消費の枠はきわめて狭いものとなっているからです。それにたいして、激烈な競争の中で大資本の市場に出す生産物はますます大量になってゆくわけですから、それは、おそかれ早かれ、狭い消費の枠にぶつかかり、市場には売れない商品、貨幣に転化しえない商品が溢れるようになります。

もともと、生産は需要「消費充足」のための生産であるはずなのに、資本主義のもとでは、需要「消費」とは無関係に、ひたすら最大限の剰余価値生産のために生産だけが突っ走り、労働の生産力の増大が推進されるのですから、右のような生産と消費との矛盾は必然的に拡大「発展をとげてゆき、そのために、その矛盾を強力的に解決し調整することが必然となります。それが、資本主義世界を周期的に襲い、これをその根底から震撼させないではない経済恐

慌というものです。恐慌は、資本主義的生産関係のもとで資本により労働の生産力が著しく増大して、すでに資本主義的生産関係の狭い枠の中には納まらないほど高度に成長したこと、その生産力と生産関係との矛盾が増大をとげて、その生産関係をば、増進した生産力に対応した、より高い生産関係に根本的に変革する以外に解決の方法はありえないというところまで、その矛盾が十分に成熟していること、そうした根本的な解決が迫られているものだとすることを、明確に示しているものにほかならないのです。

ですから、資本主義的生産様式のもとでの必然的な資本による労働の生産力の増大は、直接的には、労働力の担い手の多大の犠牲において資本が最大限の価値増殖を確保するためのものにほかならないといえ、客観的・歴史的には、それは、資本主義的生産様式を揚棄したより高い社会、つまり、労働力の担い手たち自身が主人公となる新しい社会主義社会を築きあげるべき物質的諸条件をととのえるものであり、またそのようなより高い社会への変革を不可避なものとして促進するものだといわなければならないのです。

8 資本主義的取得法則

本来的私的所有のもとでは、労働生産物が誰のものであるかということはおよそ問題にならなかつたものです。私的所有者・私的生産者個人が、その私有する生産手段をつかつて、自分個人の労働力を支出してつくりだしたものです。この生産物が彼自身のものであることは、自明です。それは、彼自身が汗水たらしてつくったものです。その労働生産物ばかりでなく、その生産手段も、その他いっさいの物的富はひとつのこらず、彼ひとり所有するところのです。ですから、この場合、所有 (das Eigentum) は労働によってつくりだされたものであり、所有を決定するもの

は労働である、ということになります。

では、資本主義的生産様式のもとでは、どうでしょうか？ 資本家は、たとえば五〇〇〇万円の資本をまず自分の労働によって所有していて、これで生産手段一四〇〇〇万円と労働力一〇〇〇万円を買い入れて生産を行なうものとしましょう。剰余価値率を低く見積って一〇〇%とし投下価値額を一年で回収するものとし、一年の終わりに四〇〇〇万円プラス一〇〇〇万円のほかに一〇〇〇万円という剰余価値額を手に入れます。この最後の一〇〇〇万円は、賃銀労働者からロハでまきあげた不労所得であって、そこには彼自身の労働はほんのこれっぽちもふくまれていないのは言うまでもありません。この資本家はこの一〇〇〇万円を個人的に消費することもできませんが、いま、競争にうちかつ必要上これを追加投資して資本を増大させるとし、労働力と生産手段とへ以前と同じ割合で追加するとしますと、この追加された資本の生産手段分は八〇〇万円、労働力分は二〇〇万円となります。そこで総資本五〇〇〇万円プラス一〇〇〇万円の計六〇〇〇万円を投下しますと、その年の終わりに、さきの五〇〇〇万円は前年と同じく一〇〇〇万円の剰余価値をもたらしますが、追加された一〇〇〇万円は、二〇〇万円の剰余価値をもたらします。この資本家ははじめの五〇〇〇万円は自分の労働でつくりだしたものだと言い張っていますので一応これは認めておいてやるとしても、問題になるのは、追加された一〇〇〇万円のほうです。これが、資本家の労働ではなくて、まさしく賃銀労働者の労働をロハで自分のものにしたもの、つまり不労働によって取得したものであることは明らかです。その不労働によって取得した一〇〇〇万円がさらにまた二〇〇万円の不労取得分ともなつて資本家のふところどころがりでこんでくることになっているのです。つまり、この一〇〇〇万円プラス二〇〇万円について、それが誰のものをかを決定するもの、いいかえますと、その取得 (die Aneignung) を決定するものは、労働では

なくて、まさしくその反対の不労働になつていきます。これはたいへんな変化であります。

(4) ここに「一応認めておく」と申したのは、そんなことは赤のうそっぽちで、一文残らず強力的に非道なあらゆる奸策を駆使してまきあげてつくつたものだということは見えて明らかであるからです。まあ、かりに一日の労働の成果を大幅に見積って二万円として、これを一文残らず貯めて、霞を食って裸のまま生きつづけているとして考えてごらん下さい。この「仙人」は、飲まず食わずの裸のまま六年十カ月ものあいだひたすら労働に没頭していなければ、五〇〇〇万円は貯まらないのです。こんな怪物「仙人」の資本家が、どこにおいでなのでしょうか？

右のように、本来的私的所有のもとで、所有を決定するものは労働——正確には自己労働——でしたが、資本主義的私的所有のもとでは労働生産物は誰のものであるかという取得を決定するものは、まさしくその正反対の不労働に転変してしまつたものです。マルクスは、その名著『資本論』第一巻第二章「剰余価値の資本への転化」の第一節「拡大された規模での資本主義的生産過程 商品生産の所有法則の資本主義的取得法則への転変」の中で右の転変についての確な説明を与えていくれます。

マルクスによるこの資本主義的取得法則の解明は、実に重大な意義をもっていることを、私たちはしかと銘記しておくことが絶対に必要です。というのは、この法則の解明によつてはじめて、今日私たちを取り巻いている巨大な資本のすべて、それらの所有する資本金から豪壮な建築物——ビル、工場、交通機関、等々——、ありとあらゆる設備・資材にいたるまで、ひとつのこらず、何千万という勤労人民大衆の労働のの成果、汗と膏と血の結晶を、ロハでまきあげて成つた不労働の累積でしかないことが争う余地なく明白なものとなつて浮びあがってきますし、そこから、これらのいっさいの社会的富を不労働者の手から収奪してことごとくこれらを勤労人民大衆全体の支配する社会の手に移すことは労働力の担い手である全人民大衆の当然の権利でもあり義務でもあるものだという、厳然たる歴

史的課題の根拠がこの上なく明確なものとなってくるからです。

9 「金の卵」を生む貨幣の専制支配

私たちは、前の節で、不労働による他人の労働生産物の取得という、驚くべき法則がこの資本主義社会で貫徹し支配していることを知ることができました。しかし、私たちは、その不合理さに驚嘆ばかりしてはいられないのです。というの、この不労働による他人の労働生産物の取得にあずかるのは、賃銀労働者を雇い入れて、これを生産手段に結びつけて生産物・商品を生産し販売するという仕事、簡単にいって生産という仕事を担当する産業資本家であつて、彼が現実に残余価値の生産・搾取を行なう者であるからですし、またそのかぎりで可能かつ必然であるわけですが、この資本主義社会には、さらにその上を行く者、社会の存続を支える労働生産物の生産などにはいっさいかわることなく、なにも仕事らしい仕事もせず、ただ坐ったままで、その所有する貨幣を動かすだけで、時間がたちさえすれば、その貸付けた貨幣の額に応じてこたえられない増殖分・利子を借手からまきあげるといふ資本家がおいでであつて、しかも、これら利子生み資本家の階層が産業資本家階層をはじめとして独立生産者層から賃銀労働者階層まで完全に支配しているという現実があるからです。

産業資本家も利子生み資本家ともに資本家階級の一員であり、彼らの取得する産業利潤も利子も、その源泉はいずれも賃銀労働者から搾取した剰余価値ですし、利子は、理論的には、本来、産業資本家が搾取した剰余価値の分化形態でありその一部分にすぎないものですが、しかし、今日では、利子生み資本家階層のほうが生産資本家階層にたいして絶対的な優位を保っており、すこしく誇張していえば完全に支配していると言わなければなりません。それ

は、資本主義的生産が高度に発達した国では、どこでも、独占的な巨大資本——産業資本と銀行資本——が形成されて国民経済全体を支配するようになっており、独占的な大産業資本と独占的な大銀行資本とは密接不可分に結びついていながら、しかもそのなかで、貨幣を握る銀行資本が商品を握る産業資本の死命を制しうる立場にあるということがあるからです。貨幣はそのまま価値のかたまりですが、商品は、たとえいくら大きな剰余価値をふくんでいても貨幣に転化しなければ無意味なものとなってしまいますし、そのうえ、価値を実現して貨幣になるためには幾多の困難と変動があり、しかも景気変動、とくに周期的恐慌によって実現困難または不可能がきまってやってくる、ということがあります。そのような場合、価値のかたまりである貨幣を自由にする独占的な大銀行に依存せざるをえないのです。産業資本にとって不可避のたんなる資本規模拡大を実現することでも、すべて大銀行に頼らなければならぬことは、周知のところでは、

このような発達した資本主義国では、貨幣は、たんに価値の結晶であるだけではなく、むしろ、時間の経過にとまってひとりでに利子・「金の卵」を生む資本という性格をもつようになります。かつて本来的私的所有のもとは、貨幣はたんなる価値の固定した結晶にとどまっていたましたが、その価値の結晶である貨幣が生まれ流通することによって、独立生産者の分解が惹き起され、まさしくその貨幣の作用によって、貨幣が価値増殖する貨幣に、つまり産業資本に転化するという事態がもたらされました。ところが資本主義的生産が支配するようになり、さらに独占の大資本が形成されてきますと、貨幣は、そのまま、時間がたちさえすればそれ自身のうちから「金の卵」を生み出すものになり、そういう力をそれ自身をなえているものとして、すべての人間に対立し、支配するものに成り上ったのです。

まあ試みに一万円のお金を机の上に十枚並べて見ていてごらん下さい。いつまでたっても「金の卵」は生まれてはきません。しかし、これを他人に貸し付けるときには、それはたちまち五千円という「金の卵」を生むものになってしまう。ですから、たとえ貸し付けられるという運動をしないで、そのままでも、その貨幣は「金の卵」を生む貨幣だとみなされ、すべての人間にたいして「金の卵」を生む貨幣として妥当し、通用するようになります。必要あって十万円のお金を借りた人は、ただの十万円を借りたのではなく、五千円の「金の卵」を生む十万円を借りたことに、いやおうなしにされてしまうのです。百万円という貨幣を所有して自由にするのできる人は、「金の卵」五万円を生む貨幣を所有しているのです。ここからして、低賃銀の故に生活費にこと欠いて貨幣を借り入れる必要に迫られがちな勤労者にたいして、その貨幣を貸し付けることによって確実にしこたま「金の卵」をまきあげて太りに太るサラ金業者も続出してきます。誰もが、「金の卵」を生む貨幣にとりつかれ、「金の卵」を生む貨幣を少しでもより多く獲得し、勞せずしてその「金の卵」をできるだけたくさんふところにいれようとけんめいになっています。ところが、この「金の卵」を生む貨幣を大量に握って、これを巧みに動かすことによって、莫大の「金の卵」を取得することができ、「金の卵」を生む貨幣にとりつかれてそれに依存せざるをえない勤労人民大衆から独立生産者、中小資本家にいたるまで、おしなべて一人残らずその支配下に収めて、ありとあらゆる方策をつかって、いよいよますますふくれあがる「金の卵」を獲得しているのが、ほかならぬ独占的な大銀行資本であり、また、これとかたく結びついているさまざまな形態の金融業資本と資本家御用の国家機関にほかならないということは、今日、目を追ってますます私たちの前にはっきりと示されてきているところです。

およそ人間社会というものは、生産によって支えられ、生産によって発展をとげてゆくものです。しかし、「金の

卵」を生む貨幣が支配をして、あらゆる階層の人々、あらゆる社会的事業がそれにとりつかれ、左右され、動かされていくことは、労働も生産もせずただ寄生しているだけの貨幣所有者が支配していること、つまりこの社会全体が生きながら寄生的な存在となり、したがって不可避免的に腐朽の度合を深めてゆくという、注目すべき傾向を強めないではないかということを示しているものと言わなければなりません。このような、寄生的な「金の卵」を生む貨幣を大量に握る強大な資本主義諸国が、ありとあらゆる苦難と犠牲に堪えながらその解放のために奮闘をつづけている世界の後れた発展途上諸国の被抑圧労働人民の驚くほど大量の汗と膏と血をもつてこしらえあげた「金の卵」を、あらゆる強力的方策を弄して、一方的にまきあげつづけているという事態は、はたして、いつまでつづくことができるでしょうか？

10 発展法則

本来的私的所有のもとで賣く商品の法則が貨幣を生みだし、そして商品生産と貨幣流通の展開が必然的に独立生産者の分解をおしすすめ、資本主義的私的所有の支配する社会に、つまり資本家階級と賃銀労働者階級との階級対立を基本とする資本主義社会の成立・発展に導かざるをえないものであるという、いわゆる変化・発展法則については、さきにもふれました。ここで問題となっているのは、資本主義的生産様式そのものが、どのような発展法則をもっているか、どのような法則にしたがって、どのように必然的に変化・発展するか、また変化・発展しなければならぬか、ということですが。しかし、この問題についても、すでに本論稿の「7」において、それにたいする答えが示されているといえます。つまり、できるだけ大きな剰余価値の搾取・実現を推し進めなければ資本は資本として存続しえ

ないという、資本主義的生産様式を貫く基本的法則——剰余価値の法則——によって、資本蓄積がますます推進され、資本を構成する生産手段はますます大規模で機械化されたものになってゆくと同時にますます大量の労働力を結集した大規模な協業が行なわれるようになって、労働の生産力はますます増大をとりあげてゆきます。しかし、このような労働の生産力の増大という、いわば社会発展の推進力は、資本主義的生産関係のもとでは、その十分な展開が許されず、労働の生産力がフルに發揮されれば、必ず資本主義的生産関係によって規定された狭い消費の枠と衝突し、経済恐慌を惹き起し、これによって一時的解決・調整をうけざるをえないということになります。しかし、経済恐慌によつては、その矛盾は、反つて拡大され深化するばかりで、ますますより激烈な爆發をくりかえすことになり、結局、この發展した生産力に対応しえなくなった資本主義的生産関係を根本的に變革して、發展した高い生産力に対応した新しい、より高い歴史的生産関係の社会をつくりだすことによって、矛盾の終局的解決をはかる以外に、社会發展の道はありえないのだということが、理論的にも、また歴史的事実によつても、確証されることになります。簡単に言いますと、資本自身が社会の發展「變革を不可避的なものにする高い生産力をつくりだす」ところに發展法則の基本がある、と言えます。ただし、抽象的な労働の生産力だけでは社会の存続・發展はできませんので、そこには、その高い生産力を一身に現実に担う労働力の担い手と、同じく高い生産力を支える物質的諸条件とがなくてはなりません。その労働力の担い手こそは、資本主義社会を支えていると同時にその變革の主体的要因となるべき賃銀労働者階級、なかならず大工業プロレタリアートにほかなりませんし、また、そのための物質的諸条件は、同じく資本そのものによつてつくりだされるきわめて大規模な社会的生産手段と同じく大規模な生産組織にほかならないことも、すでに読者諸君のよく理解していられるところだと思います。ひとこと言えば、資本は、それ自身の中に發展の

原動力をもっており、それ自身の内的矛盾によってそれ自身の根本的な揚棄を準備し、必然にするものである、と言えましょう。

結びに代えて

人間とはどういうものか、真の人間の在り方は、どういうものでなければならぬか？——経済学がおよそ「経世済民」の名に値するものだとの誇りをもつものであるかぎり、この問いにたいする明確な答えが、その理論体系の基礎にしっかりと銘記されていなければならぬと思われまじし、また、そのような真の人間が住むに値する真の人間社会をうちたてる確実な道すじを明示することが、もっとも重大な焦眉の任務であつて、そこにこそ科学としての経済学の字在理由がある、と私は考えています。

私がこれまで、かなり長い歳月をかけて拙い努力をつづけてきてようやく辿りついたさしあたりの地点というのは、人間についてのつぎのような考え方から成っているものです。つまり、真の人間とはまず、発達した精神的能力と肉体的能力とをその身体のうちにならなえていて、この労働力を統一的・合目的に流動させて社会の存続・発展に必要となる社会的労働——生産的労働と不生産的労働——の一環を受け持つて遂行する人間でなければならぬ、ということ。ただし、その社会的労働は、けつして個別的に行なわるものではなく、必ず多数の労働力の担い手としての自主的・計画的な協業として行なわれるものでなければならず、それによって個別的労働ではとうてい達せられない高い種属能力の發揮を実現したものでなければならぬのです。なお、その労働力の流動である労働については、つぎの二つが必要不可欠の要件となっています。その一つは、その労働力の流動はその担い手以外の他者から——他

人はもとより、それが社会であつても——無理に押しつけられ強制されたものであつてはならず、完全に担い手自身の自発的創意イニシアチブに出たものであること、その流動は、担い手自身にとって負担と感じられ苦痛など伴うようなものではないことはもちろん、それは労働力を維持し再生産するために必要かつ適当したものとして、担い手自身にとつてあきらかに楽しみとも喜びともなっているものでなければならぬ、ということ。そして、いまひとつは、その労働の生産力は、必要な生活手段をつくりだすが精一杯というふうなものであつてはならず、たとえば一日の労働時間を四時間に短縮してもなお余裕ある十分な生活手段をつくりだすことができ、したがつて、残る時間は、それぞれの労働力の維持・発展にとつて適当な労働、つまり「楽しみのための労働」に充てることができるというほどに、きわめて高いものになつていなければならない、ということ。食うために逐われている生活、かつかつの餌をもらつて苦役に追いまくられている生活——こうしたものが、はたして貴重な人間労働力の担い手としての社会的人間の生き方でしょうか？ 食うために働く——これでは、まさしく動物とまったく同じではありませんか。

本来私的所有のもとでは、人間は、自主的・計画的に労働していましたが、しかし、個別的な労働であつて、労働力そのものも、労働の生産力も、いずれも低劣で、食うための働きが精一杯のところ。この労働力の担い手を社会的な結合労働の中にひきいれ、その人間労働力を機械生産に必要な高さにものに引き上げたのが資本主義的生産様式ですが、しかし、それは、人間労働力の担い手を部分機械の生きた付属物にし、労働力そのものを排除し、不具化し、破壊することをおしすすめ、しかも、人間労働力の担い手にして、乏しい「餌」にありつきたければ、資本家の言いなりにおとなしく長時間の過度労働に、——「徒刑場」なみの監視・監督のもとに——命をすり減らすまで従事することをお受けしなければならぬ仕組みになっています。こうして資本主義のもとでは、労働力の担い手

は古代の奴隷どころか、家畜なみかそれ以下のものとしての生き方しか許されず、また資本家は、それ自身の人間労働力をただしく流動させることもせずにもっぱら不健康な反社会的逸楽にこれを消耗させることに唯一の喜びを見出すという利殖の奴隷でしかなく、このような金の亡者である動物的存在の階級が賃銀奴隷を家畜同様に扱っているのが、資本主義社会の人間の在り方だと言ふことができます。

しかし、この資本主義社会こそが、まさに真の人間社会をつくりだすための諸条件をつくりだし、ととのえ、これを成熟させるものにほかならないことも、すでに明らかなるところです。資本主義的生産機構の中で結集され、組織され訓練される工業プロレタリアートが、この社会のからくりとその中の彼ら自身の地位と力とを的確に認識してその歴史的役割をはっきりと自覚することによって、彼ら自身が真の社会的人間として生きることを保証する社会に向つて、つまり動物的社会から真の人間社会への飛躍的發展の過程がはじめて始まることになるのです。ですから、資本主義社会の歴史的意義を、もし一言でいいあらわすとすれば、つぎのようになります。つまり、それは、これまで人類が経てきた動物的諸社会の最後に位置する社会であつて、それは、この最後の動物的・非人間的社會から真にその名に値する人間社会にはじめて發展するための諸条件をととのえ、成熟させるといふ歴史的課題を担つたものである、ということです。しかし、それとともに、この真の人間社会への移行・發展が、どんなに多くのジグザグと挫折に満ちた長期にわたる過程であり、どんなにはかりしれないほど多くの尊い犠牲によつてはじめて購われることができるものであるかということも、私たちははっきりと認識していなければならぬということ、蛇足ながら、付け加えておきたいとおもいます。